

「薔薇園」への回帰
—T. S. Eliot の「子供」のイメージを巡って—

村 田 俊 一

<序>

T.S. Eliot の *Four Quartets* の “Burnt Norton” I の書き出しに見られる主人公は「時」について冥想し、その冥想はそのまま「足音」となって、記憶の通路を通り、現実の「薔薇園」が象徴している「他のこだまら」の住む世界へと入って行く。そこでは、「聞こえぬ音楽」が流れ「目に見えぬ視線」が横切る不思議な一時の楽園で、「木々は子供達で群がり、わくわくしながら身を隠し、笑いをこらえ」ているのである。

Footfalls echo in the memory
Down the passage which we did not take
Towards the door we never opened
Into the rose-garden. My words echo
Thus, in your mind.
 But to what purpose
Disturbing the dust on a bowl of rose-leaves
I do not know.
 Other echoes
Inhabit the garden. Shall we follow?
Quick, said the bird, find them, find them,
Round the corner. Through the first gate,
Into our first world, shall we follow
The deception of the thrush? Into our first world.
There they were, dignified, invisible,
Moving without pressure, over the dead leaves,

In the autumn heat, through the vibrant air,
 And the bird called, in response to
 The unheard music hidden in the shrubbery,
 And the unseen eyebeam crossed, for the roses
 Had the look of flowers that are looked at,

.....

Go, said the bird, for the leaves were full of children,
 Hidden excitedly, containing laughter.

この「薔薇園」に見られるような木々に群れ遊ぶ子供達の描写は、その他、「葉陰の子供達の忍び笑い」(the hidden laughter / of children in the foliage ["Burnt Noton" V]), 「庭の笑い」(The laughter in the garden ["East Coker" III]), 「リンゴの木の子供達」(the children in the apple-tree ["Little Gidding" V]) という表現で繰り返して表され、彼の詩劇 *The Family Reunion* では、後で述べるように罪の贖いとの関係で「薔薇園」に子供のイメージが使われている。このことを考えるなら、Eliot にとって「子供」のイメージ¹は「薔薇園」の本質的属性と考えざるを得ない。その思い出は、Eliot にとって、遠く幼い日の果樹園のニュー・ハンプシャーまで遡る²。彼はこの個人的な記憶を、1934年の詩 "New Hampshire" の中で（その意味合いは大人の悲しみを連想させる雰囲気を作り上げているもの）「果樹園の子供達の声」(Children's voices in the orchard) という形で表している。

¹ "In a letter to John Hayward. 5 August 1941, quoted in the heading to this chapter, Eliot mentioned three other sources: his own poem 'New Hampshire'; Kipling's story 'They', which he only recognized as having contributed to his poem when, five years later, he was re-reading Kipling for his anthology *A Choice of Kipling's Verse*; and a 'quotation from E. B. Browning'." (Helen Gardner, *The Composition of Four Quartets* (London & Boston: Faber & Faber, p. 39.) cf. "The 'hidden laughter of children in the foliage', which is reechoed at the end of the poem, expresses the ecstatic joy of those who have finally attained the 'still point of the turning world'. They are hidden, because this 'still point' itself is hidden 'under the palmtree at noon, under the running water', and 'under the upper branches of noon's widest tree'" (Peter Milward, *A Commentary on T. S. Eliot's Four Quartets* [Tokyo: The Hokuseido Press, 1968.] p. 28.)

² Nancy Duvall Hargrove, *Landscape as Symbol in the Poetry of T. S. Eliot* (Jackson: University Press of Mississippi, 1978), p. 115

このような個人的な記憶は想像的圧力によって変化して、ある詩的脈絡の中に現れて行くのである。³今、問題にしている“Burnt Norton”も、*Four Quartets*のそれぞれの題名になっている地名と同じように、かつて Eliot が訪れたことがある場所であるが、それにもかかわらず、この場所は観念化され、彼自身の個人的関係は薄れていることが分かる。K. Smidt は「[エリオット] は、我々が『四つの四重奏』を理解したり鑑賞するためにある程度慣れ親しんでおかなければならないようなほとんど完全なまでの象徴体系を編み出した」⁵と言っている。実際、「薔薇園」で群れ遊ぶ子供達のイメージは Dante の天国の薔薇の象徴（「天国篇」三二歌40-48）から由来したものであろう。このように幼少時のイメージが象徴として新しい深い意味の変容を伴って再出現しているところは1930年の“Marina”にも見られる。この詩の背景は、Eliot の記憶にあるニュー・イングランドの風景と Shakespeare の *Pericles* の第五幕第一場を下敷きにしたものである。死んだと思った娘 Marina の過去の思い出が朦朧とした *Pericles* に「葉陰に聞こえる囁きと小さな笑い声」（Whispers and small laughter between leaves）というイメージで表されることによって、失われた無垢な世界を取り戻し、個人的な経験を越えて生と死の交差（crisscross）の次元まで高められている。⁶このように Eliot が描く子供のイメージは、単なる幼い日の追憶を呼び起こすだけでなく、幼少時のもつ神秘的経験を通してエクスタシーの境地へと変容されて行くのであるが、この変容は「薔薇園」において特徴的に見られる。F. B. Brown 流に言うなら「詩的隠喩」（poetic metaphor）によって記述し直された現実とはもはや日常的世界ではなく変容された（trans-

³ T. S. Eliot, *The Use of Poetry and The Use of Criticism* (London : Faber & Faber, 1968), pp. 78-9.

⁴ Helen Gardner, *The Composition of Four Quartets* (London & Boston, Faber & Faber, 1978), p.29.

⁵ Kristian Smidt, *Poetry and Belief in the Works of T. S. Eliot* (London : Routledge and Kegan Paul, 1961), p. 112.

⁶ 拙論「T. S. Eliot の 'Recognition Scene' について」『英文学研究』第64巻1号（日本英文学会、1987）、pp. 60-1.

figured) 世界なのである。⁷

「薔薇園」の世界に関しては既に Leonard Unger の *T. S. Eliot : Moment and Patterns* (Minneapolis, 1956) 等で詳しく論じられているところであるが、“Burnt Norton” I の主人公は、「何の目的で」「あったかもしれない」記憶を呼びおこし「薔薇園」を訪れなければならなかったのか。本稿では、このようなことを念頭に置いて、Eliot が子供のイメージの背景にしのばせた考えを捜し求め、何故、“Burnt Norton” I の主人公が「薔薇園」へ回帰しなければならなかったのかということを、彼の詩作品を踏まえながら考察することである。

I

Eliot には、神から流れ出た子供は美しいが、人間の世界から来た子供は邪なものであると歌った詩“Animula”がある。この詩の題名は、ダンテの「煉獄篇」(十六歌 85-93) から暗示を受けた「小さな魂」という意味である。Eliot はこの一節の前半をこの詩の発想のもとにして「神の手から生まれた魂」(Issues from the hand of God) が少年期に萎縮して行くさまを描く一方、対照的に「時の手から生まれた魂」(Issues from the hand of time) の苦痛に満ちた屈折した姿を描写している。彼らは臨終の際の聖体拝領後、初めて生きることになる。これこそ生と死の逆説である。すなわち、時間は破壊するものであるが故に、第二の生のみが満足できるものであり、そして、それは死によってしか得られないというのである。

この生と死の世界は、歪められた愛と死のテーマで Eliot の初期の詩に散見される。例えば“The Love Song of J. Alfred Prufrock”において、主人公が「ギザギザした鍬を持った蟹」と一体となり、そして閉ざされた「海の部屋」に埋没して行きたいという欲望は、心理的に言って、死を待ち望んでいる荒廃

⁷ Frank Burch Brown, *Transfiguration, Poetic Metaphor and the Language of Religious Belief* (Chapel Hill and London : The University of North Carolina Press, 1983), pp. 11-3.

した人間の徴候を表しているもので、このような死の雰囲気は“Portrait of a Lady” III の若者が、いつか灰色の午後あの女が死んだらどうだろうかと想像するところにも感じられる。また“Whispers of Immortality”では「死に取り憑かれた」Webster との官能的愛の経験を通して死の極限を認識して行くところが見られる。そして、この詩のロシア女の妖女らしい Grishkin は「親しみのある乳房」(her friendly bust) で、男達に「靈魂の至福」(pneumatic bliss) を約束する。この「ニューマティック」という語はもともとギリシヤ語で「靈的」な意味を持っていることを考えるなら、この一節は Grishkin を抱擁する官能的経験によって、感性的次元を越えて超越的な実在への認識に達することを含意しているのである。このような根源的人間愛が超越的なものへ変容して行く様子は幼少時の経験にも見られる。

Eliot は“Dante”論の中で、Dante が九才の時に自分自身に起こったと言っている性的経験に触れているが、この幼少時の性的経験は時間の経過と共に純粋な内面的体験へと深化され、さらに、この体験が詩人の魂の宗教的覚醒の深化に呼応しながら、神への意志といったような方向へと変容して行くのである。このような人間の根源的愛の経験は Eliot の初期の作品では、例えば、「力に溢れ我を失った一瞬」(un instant de puissance et délire) と歌った“Dans le Restaurant”に見られるが、この性的経験は、突然の犬で邪魔されてしまう。この詩は、まさにエリオット版の『新生』で、この一部は *The Waste Land* の“Death by Water”として改訂されて行くのである。このようなことは *The Waste Land* の“The Burial of the Dead”に現れる「ヒアシンスの少女」(the hyacinth girl) が、ヒアシンスの花を腕一杯に抱え、露に髪を濡らし、話すこ

⁸ “The attitude of Dante to the fundamental experience of the *Vita Nuova* can only be understood by accustoming ourselves to find meaning in *final causes* rather than in origins. It is not, I believe, meant as a description of what he *consciously* felt on his meeting with Beatrice, but rather as a description of what that meant on mature reflection upon it. The final cause is the attraction towards God.” (T. S. Eliot, *Selected Essays* [London: Faber & Faber, 1966], p. 274.)

とも見ることも出来ず、ただ「光の芯を見つめていた」(Looking into the heart of light)ということにも見られる。この場合は、本質的不毛性はその完成を妨げているのである。この経験が変容されて甦るためには「薔薇園」を待たなければならない。つまり、Eliotは幼少時の性体験の空間の場を個人的なエデンの園として把握し、その経験を変容された形で甦らせて、不毛なる「荒地」的世界から脱皮しようとしたのである。

このように“Animula”に見られる生と死の逆説は、人間の根源的愛が宗教的次元において甦って行く変容と質を同じにするものであるが、不毛なる「荒地」ではこの甦りはかなわぬ願いである。*The Waste Land*のエピグラフで、クーマエの巫女 Sibi が「私は死にたい」と述べているが、再生のためには死が必要なのである。死を巡る死の思想は、“A Song of Simeon”に見られる Simeon のように、キリストの救済が始まったのを見て人間の世界がいやになり、死を願う「死」に脱出口を見出だして行くのである (Let thy servant depart / Having seen thy salvation)。Eliotにとって「死」は決して否定的なものではなく、輝かしい光の世界、霊的な世界なのである。束の間の「薔薇のとき」(The moment of the rose)と永遠の死を意味する「イチイのとき」(the moment of the yew-tree)は「等しき持続」(equal duration)なのである (“Little Gidding” V [11.232-3])。Eliotは、このような死と等価、等質である「光の世界」を、既に十七世紀形而上詩人 Henry Vaughan の“The Water-fall”や “They are all gone into the world of light”等の詩に見出だしている。これらの詩では、“Animula”に見られるように、人間は「神の手から」一時的に追放され、闇または夜にたとえられる地上に生を受け、再び「光の世界」へ回帰する、という新プラトン主義の原理に根ざす思想が述べられている。この思想は Vaughan の代表作 “The Retreat” に端的に表現されている。一般に、この詩は Wordsworth の “Ode—Intimations of Immortality” の最初の四節で提示された疑問 一つまり、幼児期に感じられた「天上の光」の感覚が年をとるにつれて薄

れて行くのは一体どういう理由によるのだろうか— に対する答えの拠り所として指摘される。Eliot は1927年 E. Blunden の *On the Poems of Henry Vaughan : Characteristics and Intimations* の書評として書いた“The Silurist”の中で、この比較は「ヴォーン、そして、またワーズワースにとっても不当なものである」⁹と述べ、“Mystic and Politician as Poet” (1930年) では、この“The Retreat”を引用し、ここに見られる経験を「あたかも、あの非常に異なっている作品であるダンテの『新生』もまた、幼児期の特定の経験に言及していると丁度同じように、ある特定の経験あるいは幼い時期の経験に言及している」と述べている。Eliot はこの外に Thomas Traherne の「人間の息子達は神に捧げられたもの」と歌った“Wonder”、幼年期の持つ神秘的な性質を記した *Centuries of Meditations* 等にも触れ「彼の主な靈感は、ヴォーンも取り扱った幼児期の世界の奇妙な神秘的な経験と同じである」と指摘している¹⁰。

このように、幼年期に見られる奇妙な神秘的経験を通して生まれ出ずる前の「金色に輝く雲や花」(“Retreat” [1.11]) の世界を懂れて行く考え方は、旧約聖書のアダム神話から言うなら、人類は、エデンの「庭」から追放され、荒野をさまよう身となり、以来、始源の至福の「庭」への絶えざるノスタルジアを持ち続けてきたことに呼応している。このように見るなら「薔薇園」への回帰とは、後で詳しく考察するつもりであるが、我々の生まれ出ずる場である天上の光の領域への回帰と考えられる。そして、このような自己の起源を天の「故郷」におく考え方を押し進めて行くなら、当然のこととして初期のキリスト教の一集団であるグノーシス主義 (Gnosticism) を無視する訳には行かない。このグノーシス主義はもともと「秘義的な啓示に由来し、それを知る者には救済が与えられる知識 (グノーシス) に非常な力点がおかれる」¹¹ものであるが、

⁹ T. S. Eliot, “The Silurist” *Dial* LXXXIII (3 Sep. 1927), p. 260.

¹⁰ T. S. Eliot, “Mystic and Politician as Poet” *Listener* III. 64 (2 Apr. 1930), p. 590

¹¹ *Dictionary of the History of Ideas*, Vol. II (New York: Charles Scribner's Sons, 1973), p. 326

この用語は、呪術的神秘主義の別称として十六世紀以降、曖昧に拡大解釈されて使われてきた。K. Smidt はこのような呪術的神秘的な立場から Eliot の詩の中にグノーシスの要素を指摘している¹²。しかし Eliot は決してグノーシス主義者ではない。本稿の目的は、元より、グノーシス主義の教義学でも歴史学でもないが、“Burnt Norton”の主人公は何故この生まれ出ずる以前の世界である「薔薇園」へ踏み出して行かなければならなかったかということ、グノーシスの本来の意味に立ち帰り、これとの関連において考察して行くことである。

II

Eliot が見た Vaughan の「光の世界」に憧れる背景には、グノーシス主義の基本をなしている「この世」に対する違和感ないし嫌悪がある。世界は「牢獄」(prison)で「暗き場所」(the dark place)であって、人間はそこに幽閉されているのである¹³。グノーシスの思弁を貫いているのはラディカルな二元論で、神と世界とは全く本質を異にする。神の外なる存在である世界は、闇の領域である。人間の身体と魂とは世界に属しているが、魂の中に閉じこめられている霊は神の実質の一部である。この魂と身体に埋没している霊、即ち、人間の本質的自己を覚醒させ、解放させるのがグノーシス(認識)である。つまり、霊はこの世界の中に囚われていて、キリスト教的な恩寵とは違った内なる光によって、この囚われから解放され、真の故郷へと回帰するのである¹⁴。このよ

¹² Kristian Smidt, *Poetry and Belief in the Works of T. S. Eliot* p. 225.

¹³ “The goal of liberation can be attained only gradually with the aid of divine messengers and redeemers, and lies either in death (of the body) or at the end of the world itself. In the interval the destiny of the ‘soul’ is accomplished, ... The world is its ‘prison’, the ‘house’, the ‘dark place’ – all expressions used alternatively and in rich variety by the gnostic texts to describe the situation.” (Kurt Rudolph, *Gnosis, The Nature and History of Gnosticism*. Translation edited by Robert McLachlan Wilson [Sanfrancisco: Harper & Row, Publishers, 1983], p. 109.)

¹⁴ “The redemption guaranteed by means of ‘knowledge’, in the sense of an escape from the entanglements of earthly existence, is first realized by the gnostic at the time of his death, for at this moment he encounters the everlasting, reawakening fact of release from the fetters of the body, and is able to set on the way to his true home. This process, familiar also in other religions, is called the ‘ascent of the soul’ or the ‘heavenly journey of the soul’. For Gnosis death is thus very definitely an act of liberation.” (*Ibid.*, p. 171.)

うなことから考えるなら、Vaughan の思想体系は、きわめて正統的なキリスト教的啓示神秘学に根ざすもので、決してグノーシス主義ではないが、例えば *The Mount of Olives* の「闇の中の人間」(“Man in Darkness”)¹⁵ や「私があなとの輝かしくきびしい眼の前に現れるとき、… 私の内部に、いかなる闇と死の住処を、あなたはおみつけになるでしょうか」¹⁶ というような一節を目にする と Vaughan 自身のこの世に対する唯我論的な絶望観が読み取れる。

Eliot が、このような Vaughan の「光の世界」に惹かれた背景には、同じようにこの世界に対する絶望観が見られる¹⁷。このことは、彼が“Baudelaire”論の結びで「人間は原罪を負うものである」という T. E. Hulme の一節からの引用に凝縮されている。Eliot がこのような世界観ないし宗教観を持つようになったのは、彼が幼年時代ユニテリアン (unitarian) としてしつけられたことが大きく作用しているようである。彼が入学した当初のハーヴァード大学では、このユニテリアンが定着し、当時の学長 Charles William Eliot の奉ずる「未来の宗教」なるものは、魂の救済などと全く無縁な現世の福利を追求するためのお題目に過ぎなかった¹⁸。この墮落したユニテリアズムから超越的絶対者への解脱は、Eliot の詩劇 *The Cocktail Party* の Celia の宗教的軌跡のうちに見られる²⁰。彼女は墮落したユニテリアズムの「お作法」とか「心理」の問題といった合理的な説明ではどうにもならない罪意識に苦しみ、それを契機として超越的な神へと向かって行ったのである。このような精神の描く軌跡を Eliot に当

¹⁵ *The Works of Henry Vaughan* Vol. 1., ed. L. C. Martin (Oxford: Clarendon Press, 1957), p. 169.

¹⁶ *Ibid.*, p. 160.

¹⁷ 拙論「T. S. Eliot と Swift — 『絶望』と『懐疑』を中心に」『文経論叢』第19巻第3号 (弘前大学人文学部、1984)、pp. 99-119.

¹⁸ T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 430.

¹⁹ Robert Sencourt, *T. S. Eliot A Memoir* (London: Garnstone Press, 1971), pp. 26-7.

²⁰ Well, my bringing up was pretty conventional – I had always been taught to disbelieve in sin.
Oh, I don't mean that it was ever mentioned!
But anything wrong, from our point of view,
Was either bad form, or was psychological.

ではめてみたとしても（彼は Celia と違って殉教の道を歩まなかったが）そんなに的外れではないと思う。実際、この派の中心は三位一体説の否定で、その否定からキリストの神性の否認が生じる。ここには、越え難い深淵が神と人間との間に介在し罪の意識が存在しない。つまり、この派は概して、墮罪、贖罪、永遠の刑罰などに関する正統的教説に対して否定的であった。一方 Herbert Read が指摘しているように Eliot には何か良心の呵責を受けて、隠れた悲哀あるいは罪意識に苦しんでいるところがあった²¹。彼は何とかして、この罪意識にさいなまされている人間と神との間に架け橋を見出だそうとした。彼がこのユニテリアニズムからアングロ・カソリックへ改宗して行ったのも、神と人間との隔絶性を越えて行くためには、キリストという窓を通してでなければ達せられないと考えたからであろう。Eliot が若き日に培った Leibniz のモノダ論との比較における F. H. Bradley 哲学の「有限的中心」(Finite Center) や「唯我論」(solipsism) 等についての哲学的思索は、²²このような彼の宗教観を作り上げて行くのに必要な段階であったのかも知れない。この唯我論に基づいた「閉ざされた」牢獄の世界は、彼の初期の詩“The Love Song of J. Alfred Prufrock”にもその痕跡が窺われるが、²³自注に F. H. Bradley から唯我論の世界を意味する一節を引いた *The Waste Land* の「私は鍵が一度ドアで回る音を聞いた」(I have heard the key / Turn in the door once [11.411-2]) のイメージを通して、*Sweeney Agonistes* の最後の部分に見られるコーラスの「フーハー」(the hoo-ha) に脅かされる「閉ざされた」世界の恐怖へと発展して行くのである。²⁴

このような孤立は *The Family Reunion* の Harry によって「秩序整然たる宇宙のただ中の一つの孤立した廃墟、その偶然のひと切れの屑」(an isolated ruin,

²¹ T. S. Matthews, *Great Tom* (New York : Harper & Row, 1974), p. 87.

²² “The Development of Leibniz’ Monadism” *The Monist* XXVI (October 1916) 534-56, “Leibniz’ Monads and Bradley’s Finite Centres” *The Monist* XXVI (October 1916) 566-76.

²³ J. Hills Miller, *Poets of Reality* (New York . Athenaeum, 1974), p. 139.

²⁴ 拙論「*The Family Reunion* における見えざる Eumenides をめぐって」『T. S. Eliot Review』No. 1 (日本 T. S. Eliot 協会、1990)、15-7.

/ A casual bit of waste in an orderly universe [Part II, Scene I]) というイメージで表わされることになる。この孤立した不安は、パスカル流に言うなら「私の知らぬ、また私を知らぬ無限に広い空間の中に投げ込まれ、私は恐れおののく」(『パンセ』205)と言った自然的宇宙の中の人間の孤独なのである。この世界内存在に対する魂の反応が恐怖であるということは、グノーシス主義にしばしば繰り返して見られる主題なのであるが、Eliotは何とかしてこの「閉ざされた」牢獄と化した世界を乗り越えようとした。このような考えは、当然のこととして、神と世界、従って人間と世界の間を規定して行く二元論の問題に結びついて行く。²⁵ Eliotの二元論は*Four Quartets*のエピグラフにある一節「上への途も下への途も同じ一つのものである」というHeraclitusに始まってDionysus the Areopagiteの否定神学を経て、Nicolas of Cusaに至る「反対物の一致」(coincidentia oppositorum)に基盤を置くものである。つまり、この論理は、はじめに対立する二つの項目を想定し、その上でその対立を解消し、両項目を融合するより高次の存在論的次元を見出すことを目的としたもので、多くの神秘思想に共通して見られるものである。このようなEliotの二元論は、改宗を境として、その合一、エピファニーといった認識を越えた体験的な一瞬に見られる。この一瞬は、Eliotの「回転する世界の静止点」(the still point of the turning world ["Burnt Norton" II])というイメージで表されているが、この詩的心象は*Ash-Wednesday V*では「御言葉」(the Word)、*Coriolan*の"Triumphal March"では「おお、隠されて」(O hidden)、そして*The Rock*の最

²⁵ Hans Jonas. *The Gnostic Religion* (Boston, 1964) [秋山、入江訳『グノーシスの宗教』(人文書院、1986)、pp. 429-431.]

²⁶ "[B]eyond the objective worlds of a number of finite centres, each having its own objects, there is no objective world. Thus we confront the question: how do we yoke our divers worlds to draw together? How can we issue from the circle described about each point of view? and since I can know no point of view but my own, how can I know that there are other points of view, or admitting their existence, how can I take any account of them? (T. S. Eliot, *Knowledge and Experience in the Philosophy of F. H. Bradley* [London: Faber & Faber, 1964], p. 141) 拙論「T. S. EliotのVia Mediaについて」『英文学研究』第57巻2号(日本英文学会、1980)、pp. 180-2.

初のコーラスでは「善と悪の永遠の葛藤」(The perpetual struggle of Good and Evil)の対立物の中に結び付けられている。二項対立的なものを包含しながら一元論的世界に惹かれていく Eliot の態度は、彼の作品の中で“Recognition Scene”²⁷という形で表れている。

一方、グノーシス主義の二元論は、世界の初めに善神と悪神を置くゾロアスター教によって影響されているもので、ラディカルに対立する二項目を絶対的な唯一の真理に還元することはない。²⁸ Eliot の作品の中でこのような二元論の考えがはっきりと打ち出されているところは、詩劇 *The Cocktail Party* で精神科医 Reilly が Celia のドッペルゲンガー (doppelegänger) を見たとき、既に死んだ「大地」の子 Zoroaster が庭で自分の幻に出会った一節を引き合いに出しているところに見られる。²⁹ この辺は、現実世界を越えた背後世界 (hinterwelt) を認識して行くというグノーシス的な立場から、興味深く観察されることであろう。このように、Eliot の“Recognition Scene”は、単に、親子とか夫婦とかの邂逅、再会の場面だけではなく、自己ともう一人の自分、“Burnt Norton” I に照らして言うならば、「薔薇園」に入っていく主人公が、か

²⁷ 拙論「T. S. Eliot の 'Recognition Scene' について」『英文学研究』第64巻1号 (日本英文学会、1987)、pp. 51-65.

²⁸ Kurt Rudolph, *Gnosis, The Nature and History of Gnosticism*. Translation edited by Robert McLachlan Wilson (Sanfrancisco . Harper & Row, Publishers, 1983), pp. 59-60.

²⁹

*Ere Babylon was dust
The magus Zoroaster, my dead child,
Met his own image walking in the garden.
That apparition, sole of men, he saw.
For know there are two worlds of life and death :
One that which thou beholdest : but the other
Is undemeath the grave, where do inhabit
The shadows of all forms that think and live
Till death unite them and they part no more !*

When I first met Miss Coplestone, in this room,
I saw the image, standing behind her chair,
Of a Celia Coplestone whose face showed the astonishment
Of the first five minutes after a violent death.

The Cocktail Party, Act Three

つての昔の自己を含めた「他のこだま」と出会い 一つまり、自己の生霊—と出会うことによって、日常的な背後にある超自然的なものを認識、発見していくという意味合いをも含めている。これは、最終的には、自分自身の探求、自分自身との出会いという超越的観念と結ばれて行くのである。

この世から逃れ、原初の自己へ帰る道を探求し、己の出自を自分の生まれ故郷である光の領域へ帰還する行程は、グノーシス主義者の Clement of Alaxandrian によって自己認識のための問として定式化されている。

我々は誰か。我々は何処にいたのか。我々は何になったのか。以前どの世界から我々はここに投げ入れられたのか。我々はどの目標に向かって急いでいるのか。我々は何から解放されるのか。誕生とは何か。再生とは何か。³⁰

つまり、このグノーシス主義の本来の意味である「知識」とは、この世ではない何処かにあるはずの「真の故郷」を「知る」(グノーシス) ことである。グノーシス主義者によると、我々は本来「この世界」に属するものではなかった。我々には我々自身の自己があり、それは「この世界」より以前から存在していたものであった。我々はいつか「この世界」から抜け出して、この世界の「外」にある真の故郷への回帰を望むのである。この「外」にあるグノーシスの神は、キリスト教の神やプラトン哲学のデミウルゴス (demiurge) に対立させられるもので、「知られざる神」である³¹。一方、Eliot の場合は、内面の暗

³⁰ Kurt Rudolph, *Gnosis, The Nature and History of Gnosticism*, p. 71. Cf. "To win salvation, it was necessary also to know the nature of the soul and the secrets of the higher worlds. 'Not baptism alone set us free,' said a Gnostic writer, 'but *gnosis* – who we were, what we have become, where we were, whither we have sunk, whither we hasten, whence we are redeemed, what is birth and what re-birth (*Excepta ex Theodoto*, 78 : 2, compiled by Clement of Alexandria).'" (Sidney Spencer, *Mysticism in World Religion* [Pelican Books, 1963] , p. 150)

³¹ "The positive pole of gnostic dualism, ... is a higher world which, portrayed in very varied and differing fashion, culminates in the assumption of a new otherworldly and unknown God, who dwells beyond all visible creation and is the real lord of the universe. The world is not his work, but that of a subordinate being. But nevertheless he exercises influence in varying ways for the well-being of men, ...; it is 'providence' (*pronoia*) which here comes to expression. This conception of God in Gnosis stands in contrast to all the world-gods hitherto known, who in their limitation – these is even reference to their folly – do not know the true God and therefore act as if he did not exit.

黒に徹することによって光を求める逆説的な道である。St. Augustine 流に言うなら、自己の内奥のさらに内なる超越へ、つまり、きわみにおいて底へ超越すること（『告白』 Bk.X, xxvi）によって認識する道に通ずるものである。換言するなら、Eliot は、「感覚の恩寵」（a grace of sense）の力によって救いを求めるという点において本質的にグノーシスと異なっているが、彼が、この世から逃れ、原初の自己へ帰る道を探求し、己の出自を自分の生まれ故郷である光の領域へ回帰したいという願望は、改宗の時期に書かれた *Ash-Wednesday* の書き出しに見られる「振り返る」（turn）という言葉で表されている。この言葉は、恋人の許へ帰るといふ現世の記憶にある場所と同時に神の許へ帰るといふ主人公の魂の遍歴を示すものとして幾重にも層をなしている。

III

ところで、「薔薇園」への回帰が、グノーシス的な生まれ出ずる以前の光の世界への回帰であるということは、“Burnt Norton” I の三年後に書かれた詩劇 *The Family Reunion* に現れる「薔薇園」を見ることによってよりはっきり理解されることと思う。この詩劇で「薔薇園」が現れるコンテクスは、主人公である Harry が叔母の Agatha によって自分の出生の秘密を打ち明けられ、罪の根源を知った Harry が Agatha との間で二重唱ともいふべき対話に入った時である。

I only looked through the little door
 When the sun was shining on the rose-garden :
 And heard in the distance tiny voices
 And then a black raven flew over.

The Family Reunion, Part II, Scene II.

The counter-god, remote from the world, who often carries the characteristic attribute of the 'alien', is properly to be described only negative or in images which are intended to express his inimitable status, free from any kind of relation to the world." (Kurt Rudolph, *Gnosis, The Nature and History of Gnosticism*, pp. 61-2)

この引用の「遠くからの子供の声」は、陽のあたる「薔薇園」から漏れてきた Harry の声で、ここには既に Harry がいて Agatha を迎え入れるのである。この辺の事情をもう少し説明するなら、Harry の父親は、Agatha との愛のため、Harry を既に孕んでいた妻を殺そうとした。それを Agatha は阻止するのであるが、彼女にとっては、自分が Harry を孕んでもおかしくない存在なのである。このようなコンテキストを踏まえるなら、Harry の声が聞こえる「薔薇園」は、Agatha にとって、彼の生誕以前、彼の肉による発生前に彼がいたところ、つまり、遙か彼方の「あったかもしれない」過去の出来事が、この園で Harry と出会うことによって、「足音」を通して、現在の立場から贖われた形になるのである。このように考えるなら、この「薔薇園」は、根源的な人間愛にかかわる過去の可能性が成就した状態での至福の意味をも含み、閉じられた構造を暗示する「庭」ではなく神的根源となっているものである。「薔薇園」は Dante の「地上楽園」ではなく、時間の中にも外に存在する超時間についての深まった認識なのである。そして、この風景は、*Ash-Wednesday* IV の風景のイメージを借りるなら、青い色のヴェールに面を包んだ天国的な女性が地上の尼僧に変わり、死と悲しみの象徴であるイチイの木の間で、一言も語らず、十字を切る墓場と重なり合っているのである。この時、この墓場でも「木々が花さき／泉がわきでる」のである。死者の国に新たに生命が甦るのである。従って、死者の世界は、前にも触れたように、暗い、悲しい、陰鬱な、苦悩に満ちたネガティブな世界ではないのである。まさに、「薔薇のときと、イチイのときは、等しき持続」なのである。死への旅立ちは、グノーシス的に言うならまさに「輝かしき旅立ち」で、この世界からの「解放への一つの行為」なのである。³²

この故郷への探求の旅の視点から、この論文の〈序〉の書き出しで触れた

³² 註 14 参照

“Burnt Norton” I の主人公の意識が記憶の中へと降りて行く一節を考えて行くなら、この場面はきわめて重層的で、空間を作り上げているイメージは、遠く我々の祖先のそれまで遡り得る。過去に遡る記憶と同時に、グノーシス的に言うなら未来に延びている記憶があるように見える。この一節で使われている「足音」は Eliot の言う「聴覚的想像力」(auditory imagination) — つまり、「最も原始的なものに染み込み、起源に立ち帰って何かを連れ戻し、始めと終わりを求めて行く」³³ — を使いながら、St. Augustine の『告白』に見られる「足跡」(Bk. XI, x iii) を思い浮かばせるものである。従って、この主人公の「足音」が「記憶の中でこだまする」とは、St. Augustine が少年時代を回想して語る時のカルタゴの認識と同様 (『告白』そのものがそうしたものであるが)、思惟する以前に記憶の中に存在しなければならない過去を、現在の時において探求して行こうとする情景を描写したものである。St. Augustine によれば、そのような「過去とは、過ぎ去ったものに対する現在の記憶にはかならない」(Bk. XI, xx) のである。時間を現在における意識や記憶に還元してとらえる考え方は Aristotle の『記憶と想起』にその方向性を見出すことが出来るが、それはさておいて、このコンテクストを踏まえて、次に続く「私の言葉も、そのように、君の心にこだまする」という一文を考えるなら、この詩の主人公は、我々に St. Augustine のこの辺の言葉が思い浮かぶでしょう、という意味合いを込めて言ったのかもしれない。このようなことを、この詩の主人公は読者に諭しながら、だんだん細くなって通ったこともない暗い時の中にある記憶の通路を下降して行く。すると、そこには戸口があり、その向こうは、時を越えた光輝く薔薇園である。「薔薇園」に象徴される「はじめての世界」は、今

³³ T. S. Eliot, *The Use of Poetry and The Use of Criticism*, pp. 118-9.

³⁴ 'Although as for things past, whenever true stories are related, out of the memory are drawn not the things themselves which are past, but such words as being conceived by the images of those things, in their passing through our senses, have, as their footsteps, left imprinted in our minds.' (St. Augustine's *Confessions*, II with an English Translation by William Watts (Loeb Classical Library, 1979), p. 249.

まで述べてきた立場から言うなら、我々が生まれ出ざる以前の世界で、無時間的超越的な世界である。従って、ここで、「他のこだまら」、「かれら」として表されている群れ遊んでいる子供達は、自分自身の幼少時の記憶、そして一緒に園を訪れた時の子供達の記憶を遙かに越えた、肉眼では見えず、触知出来る肉体をそなえていない霊的存在として現存しているのである。当然のこととして、「かれら」と薔薇たちとの間に交わされる「目に見えぬ眼差し」は、薔薇が愛の神秘的合一の象徴であることを考えるなら、必然的に純粋な神的愛の凝視でなければならない。実際、この「眼差し」のイメージの背景には、恋し合う二人の魂と魂とが、肉体から抜け出して結び合う状態を「我々の眼差しが絡まり合った」(Our eyebeams twisted) と歌った J. Donne の “The Extasie” からの一句がある。このように “Burnt Norton” I の主人公は既に純粋に霊的存在者になってしまっている神の邦である「薔薇園」へ回帰するのである。

このような立場から見ると、「薔薇園」の世界は、Henry Vaughan の詩に表れる「前世」(pre-existence) の神話説 一つまり、我々の魂はこの地上に生まれてくる前には、天上界にあって、天国の栄光に包まれていたが、やがて天上界を去ってこの地上の世界に生まれ、成長するにつれて、「天上の光」が次第に薄れて行く— に基づいている、と考えられる。つまり、この世界を神自らの満ち溢れた源泉からの「流出」(emanation)³⁵ であるとするプロティヌス哲学からするなら Eliot はこの「流出」の方向を逆に辿って神に近づこうとしたのである。これは前に触れた「反対物の一致」と同じように、あらゆる二項対立を解消ないし融合する「一者」(the One) を想定することによって存在論の次元そのものを超越してしまう試みである。Eliot が自己を食い尽くす癌

³⁵ A. H. Armstrong, *Plotinus, Selections from his major writings, in a new English translation and with an extensive introduction* (New York : Collier Books, 1962), p. 31. Cf. Nancy Gish, *Time in the Poetry of T. S. Eliot* (Macmillan, 1981), pp. 126-132.

として捉えた「この世界」から逃れて回帰しようとした世界は、二項対立的なものを包含しながら、存在論の次元そのものを超越した「静止点」である。Eliot の思索の歩みは、大まかに言うなら、初期の詩作品で扱われた歪められた愛と死の不毛なる「荒地」から Vaughan 等の十七世紀形而上詩人達の詩に見られる天上への世界と質を同じにする「薔薇園」への歩みであったとも言えよう。“Burnt Norton” I の主人公が暗い記憶を降りて輝かしい「薔薇園」に回帰して行った姿は、まさに Eliot 自身の魂の探求でもあった。

We shall not cease from exploration
 And the end of all our exploring
 Will be to arrive where we started
 And know the place for the first time.
 Through the unknown, remembered gate
 When the last of earth left to discover
 Is that which was the beginning;
 At the source of the longest river
 The voice of the hidden waterfall
 And the children in the apple-tree

“Little Gidding.” V

この背後には、グノーシス主義者に見られる自分の生まれ故郷への強い回帰的願望が読み取れる。この一文に Eliot の個人的経験を探しだそうとするなら、一人のアメリカ人がイングランドの先祖の土地を恋い慕い、その土地を訪れてそこで永眠する生涯が見られる。Eliot が回心を契機として幼少時の経験を Dante の見た天国的ヴィジョンである「高い夢」(the higher dream) まで高めて行く変容は、象徴的であるが、葉陰で子供達が群れ遊ぶ「薔薇園」へ回帰することによって、三百年にわたって祖先が歩んできた道をまさに逆行して行くことと呼応しているのである。

Return to the 'rose-garden'

Concerning T. S. Eliot's Image of 'children in the foliage'

Shunichi Murata

After meditating upon 'time', the hero at the beginning of "Burnt Norton" of *Four Quartets* yields to an impulse to enter the rose-garden, where 'children in the foliage', 'hidden excitedly, containing laughter', are playing hide-and-seek. The garden recalls memories of his childhood and of man's innocence before the Fall. This image of a child in 'the rose-garden', which is derived from the New Hampshire orchard in Eliot's personal memory, is also seen in "Burnt Norton" V (11.171-2), "East Coker" III (1.131), "Little Gidding" (1.131) and *The Family Reunion*. Considering thus, this experience of a child might lie dormant in his mind, and reappear, such as in Eliot's "Marina", transfigured in some verse-context charged with great imaginative pressure into the ecstatic joy of those who have finally attained the 'still point of the turning world'. In other words, 'the rose garden' expressed by poetic metaphor is transfigured into the other world from our usual world. This transfiguration can be applied to the sexual experience of a child, as Eliot points out in "Dante". The restoration of this childhood experience is identified with the goal of religious life. That is why Eliot describes in his early poems the distorted experiences of love and death which are to be transfigured and revived in the 'rose-garden'. For Eliot, 'the moment of the rose and the moment of the yew-tree / Are of equal duration'. In fact, Eliot sees this world of light, which is also pre-existent before birth, in metaphysical poetry such as Henry Vaughan's

“Retreat” based upon Plotinus’ ‘emanation’.

But to what purpose does the hero of “Burnt Norton” go down into the ‘rose-garden’ ? Generally speaking, man has wanted to return to the Garden which is the origin of man since he was exiled from the Garden of Eden and wandered into the waste land. From this viewpoint of the old Testament, Eliot’s ‘rose-garden’ is considered as a Garden of Eden, as it were, the place of man’s birth, where the sexual experiences of a child are transformed into the world of light. Eliot has to go a long distance for the ‘rose-garden’. The logical conclusion of this idea is Gnosticism during the first three centuries of the Christian era. In it, great emphasis was laid on *gnosis* (esoteric knowledge) in sharp contrast to orthodox Christianity’s emphasis on *pistis* (faith). In other words, the Gnostic sects believed that there is a divine spark in man that has come from the divine realm above and has fallen into the world of fate, birth, and death. It is true that Eliot is not gnostic, but the element of gnosticism is often seen in his idea.

What I want to discuss in this paper is, using the idea of Gnosticism, to study the idea of Eliot behind the image of the Child, and elucidate the reason why Eliot returns to the ‘rose-garden’.